

園の友

育て
子と絵本

6

幼い子を持つおかあさん、おとうさんに。子どもにかかわるすべての人に。

特集

英語

どうする？

寺沢拓敬／今井むつみ
トニー・ラズロ／小栗左多里

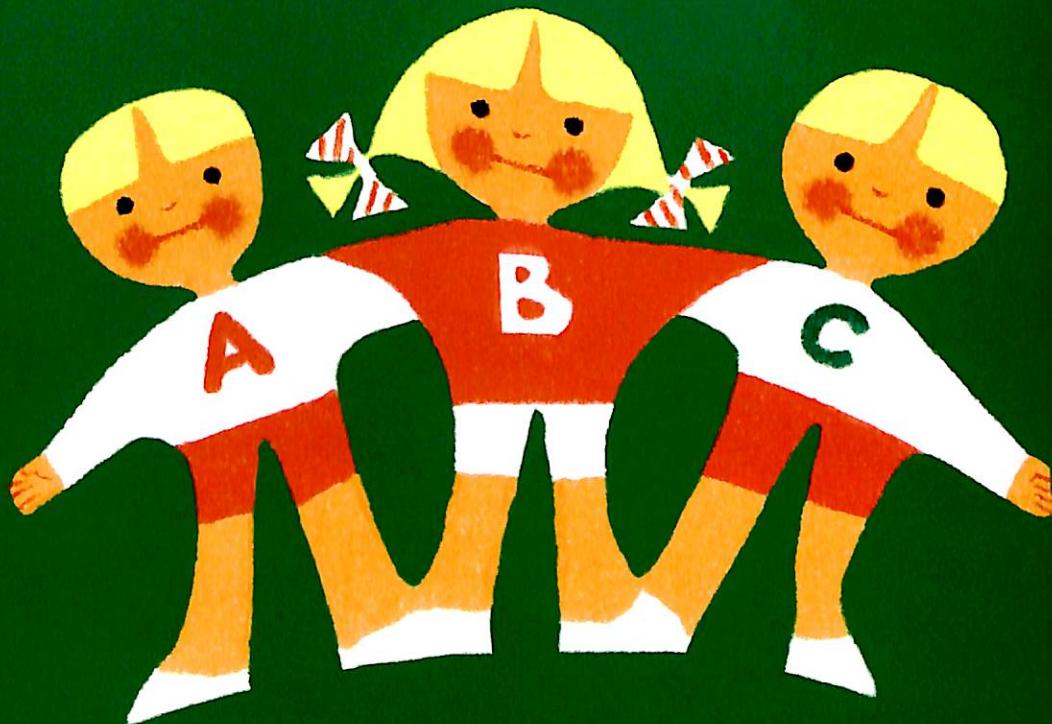
絵本を作る人⑤

うえのよう

『かさのえんそく』

みんなでハグモミ

手島 琢



言語を 習得するのに 必要なこと

子どもがどのように言語を習得していくかを研究している、今井むつみさんによると、外国語である英語を習わせる前に、とても大事なことがあるといいます。

それは一体なんでしょうか。お話を伺ってきました。

今井むつみ

いまいむつみ 慶應義塾大学教授。認知科学、言語心理学、発達心理学が専門。『ことばの発達の謎を解く』(ちくまプリマーニ新書)、『言葉をおぼえるしくみ』(ちくま学芸文庫)などの著書がある。

本語を話していても、あまり驚きませんよね。本当は、二、三歳児が日本語を話せるのはすごいことなのですが、当たり前と思うのが一般的です。ところが、自分が英語ができないと、二、三歳児が習った英語を少し話しているのを見ただけで、「この子すごい!」と思ってしまうがちです。

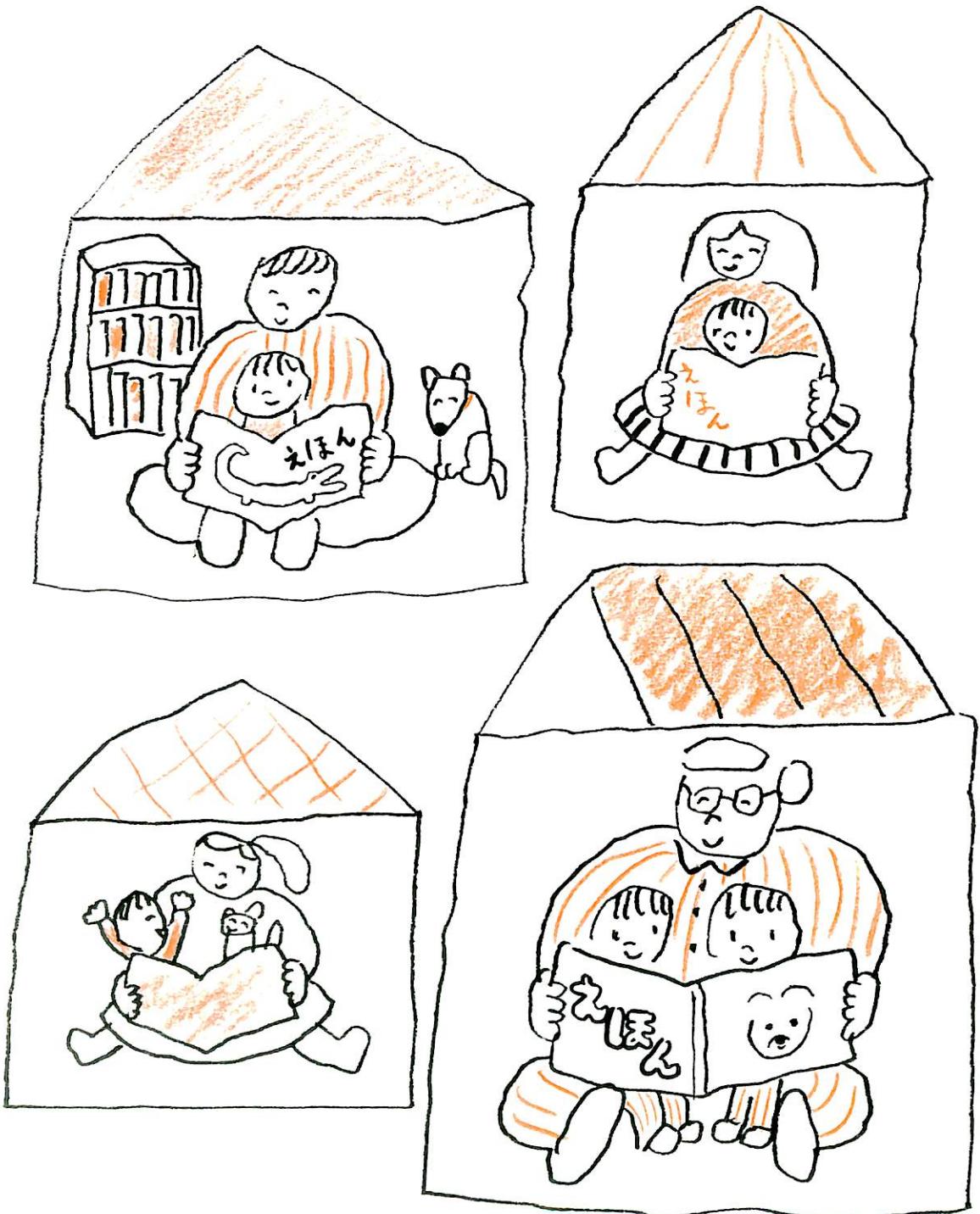
「発音が良くなるのでは?」など、さまざまなものではないかと考える人が多いようです

理由で、子どもが幼いうちに英語を始めた方がいいのではないかと考える人が多いようです

まず考えなくてはいけないのは、「英語ができる」とはどういうことか、どんなレベルを目指しているのか、ということです。二、三歳児が母語である日

ほしいとイメージしているのは、二、三歳児レベルの英語ではなく、今の社会でグローバルな仕事ができるというレベルではないでしょうか。その場合、少しごらい英会話ができるほどんど役に立ちません。必要なのは、きちんと人を説得できる文が書ける、話ができる、ということなのです。それは英語でも日本語でも同じです。大学生の日本語のレポートを読んでいても、そういうレベルに達していない人はたくさんいます。ですから、何語でもいいから、まず、人がきちんと理解できる文、人を説得できる文を書いたり、話したり、という、基本的な言語のスキルを身に付けることが大事なのです。母語でそれができなかつたら、英語でもできないでしょう。

今、日本には両親が外国の方で、日本で生まれ育ち、日本の学校に行っている子どもたちがいます。きれいに日本語を発音できて、お友達と普通におし



やべりてきて、一見、日本語不イテイブのように話すことができる。そんな子どもたちを見ると、「うちの子も、小さいうちからやれば、こういう風に英語が上手にしゃべれるようになるんじやないかしら」と思う方が多いのではないでしようか。

ただ、こういった外国にルーツのある子どもたちが、日本語ができる、通常の生活に困っていないよう見えても、実はかなりの割合で、学校の授業で苦労しているという現状があります。

——ます日本語が大事ということですね。普段の生活と、学校で使う日本語は違うのですか？

一般的な会話だと、使われる語彙も限られていて、抽象的な言葉もあまり使いません。でも学校の授業となると、小学二、三年生でも、抽象的な言葉が入ってきます。日常の語彙だけでは、学校の語彙には足りません。両親が日本語ネイティブで、たくさん絵本を読んでもらうなどある意味恵まれた日本語環境で育ってきた日本語を母語とする子どもでも、日常の言葉から学校の言葉に変わることは、かなり難しい、ある種のチャレンジです。

一、二年生だったら、そんなに落ちこぼれることはない。でも、四年生くらいになると、日本語を母語とする子どもでも、授業についていけなくなりがちです。教育現場ではこれを「九歳の壁」と呼んで

います。

九歳は、ちょうど三年生から四年生になる時です。算数では小数や分数を習いはじめます。今までは、指で数えれば分かるような、ダイレクトに自分の生活に結び付けられるような勉強

だつたのが、急に抽象的になつて難しくなっています。国語でも色々な難しい単語が入つてきます。高学年になつてからも、大人が抽象的とか難しいとか全く思わない言葉、例えば「悔しい」とか「税金」という言葉の意味が分からぬ子どもたくさんいるのです。

——どうすれば、日常会話以上の日本語の力が付くのでしょうか。

就学後に、語彙が一番身につくのはどこからかといふと、読書からなのです。子どもが自分でどれだけ読書ができるかが重要なになります。それには、子どもの日頃の日本語環境が十分なのかどうかが重要で、幼い頃に親に本をたくさん読んでもらうということが大事なのです。

なぜでしょうか？それは、自分で読書ができるようになるには、二つの条件が必要だからです。

一つは、十分に語彙があること。絵本や児童書とはいっても、やはり語彙がないと、ひらがなを音読することとはできません、意味が分からなくて全然本にならないことがあります。

ついていけず、読書を楽しめません。幼い頃からたくさん本を読んでもらっていると、語彙が増えますから、本を理解することができます。そうすると、本を読むことが好きになります。

それから二つの条件は、読書に対して、非常にポジティブな気持ちを持つていること。就学前に色々読み聞かせてもらうことで、本はすごく楽しいものなのだと思います。

そうすると、自然に自分でも読書するようになるわけです。

読書には、情報処理のスキルもかなり必要なので、読めば読むほど、読み方がスマートになつて上手くなるわけです。そうするとどんどん楽しくなる。また、自分で読む読書は、いつでも分からないところや気になるところに戻ることも良い点です。しかし、うまく読めないと、本はつまらないものと思つて、読む気がなくなってしまいます。そうすると語彙も増えていきません。

——幼い頃の読み聞かせが大事ということでしょうか。

幼児期に日常でたくさん言葉を浴びるということがとても大事なのです。子どもは言葉をただ教えてもらつて覚えるのではありません。自分で考えるという過程を経て、言語を獲得していきます。子ども

は新しい言葉を聞いた時に、その意味を自分で考えます。たくさんすでに知っている言葉をもとに、それを幼児期からずつとやつてきています。言葉がたくさんある、言葉を増やすということは、思考の訓練をたくさんするということなのです。

絵本には、外国のお話だつたり、日常にないファンタジーのお話だつたりと、色々なお話があります。そこには、家庭では普通使わない言葉が出てきます。そういう時に、「この言葉はどういう意味？」という疑問から、親子の会話を通じて、いろんなヒントを得て、自分で言葉を覚えていきます。それは、語彙の数を増やすだけではありません。要するに、新しく出会った言葉の意味を考えるという思考のスキルを養う練習をしているのです。

そして、自分がすでに知っている言葉、知識を使つて解釈するという論理の力は、

もちろん言葉の意味を考えるだけでなく、とても広範囲に思考能力というものに敷衍できるものになるのです。だから、幼い時に言葉をたくさん



浴びることが非常に大事なのです。

子どもにフラッシュカードを見せて単語を次々と答えさせると、うわり方がありますが、一

M

昭和三十一年九月

語彙を増やす過程で思考の訓練をすること
が大切で、そのために、親は子どもに絵本を読んだ
り、お話をうながしたりするなどして、言葉を増やさ
ないといけないのです。

そうです。それが何語でも、どこに住んでいても構いませんが、親が一番得意な言葉で、子どもに基盤力を付けることが一番大切です。親が読み聞かせもできて、それにに関して子どもと会話できる言語を伸ばすのが一番大事なのです。ですから、母語が日本語だったなら、お子さんに日本語でたくさん本を読んであげて、会話することがいいのです。会話も一方通行ではなく、対話することが大切です。

——普通に会話ができるれば、論理的思考がどこまで子どもについているか判断するのが難しそうです。九歳の壁に当たつて初めて問題に気つくかもしれません。それで、取り返しがつくのでしょうか

何歳でも論理的思考力をつける努力はできますし、大人になつてもできます。しかし、そのためにはみんな同じ事をすればいいというわけではな

それだけではなく、両親の母語も子どもに教えることも必要なのです。フィンランドやニュージーランドなど移民の多い教育先進国では、移民の子どもた

ませんよね。それと同じで、「こうすればいい」と言われたことを、それさえすればいいと思って、それしかやらないということではうまくいくはずがありません。

ードでたくさん覚えて、その単語をどういう状況でどのように使えるかがわからなければ、その単語を知らないのと同じです。いつ、どういう状況で使うのかを言葉で説明するのはほぼ不可能で、子どもがその言葉をいろいろな状況で使われるのを経験しその中で自分で体得していくしかないのです。

言葉に限らず、すべての知識と

いうのは、人に教えてもらうものではなく、自分で獲得していくもののです。幼い頃から、自分で考え

身につくように、親も考え
になに難しいことではあります
せん。自分の最も得意な言
語で子どもにたくさん話し
かける。そのときに、子ど
もの表情をよくみて、子ど
もの理解に応じて話し方を
工夫してあげる。最初は少
し難しく感じても、それを
心掛けて続けていれば、自
然とできるようになります。

